

週日の説教

金 大烈 神父 2010年9月22日(水)

《 先ず神様に委ねましょう 》

主の平和

今日の福音(ルカ9・1-6)の内容を簡単に説明させていただきます。

先ず、よく目に入る箇所なのですが、福音を述べ伝えるために遣わされた場合、旅には「何も持たずに行きなさい」という話がされています。これはどういう意味でしょうか。昔はこの言葉通りに従おうとする聖人達が結構いました。歩きの宣教師とか、色々なかたちで貧しさを実践しながら、いつも飢えている印象を見せながら、福音を宣教した立派な方々が沢山いらっしゃいます。しかし、それは真面目すぎる解釈です。「何も持たずに行きなさい」という言葉は100パーセント自分の頭ではなくて「神様に委ねなさい」という意味です。これから何も知らない所で、どんな反応が出るか分からない所に遣わせられる時、どの道を選ぶか、この人に話し掛けてもいいかどうか色々心配になります。そんな時「あなたは先ず神様に全てを委ねなさい。」という意味です。

今日の第1朗読(箴言30・5-9)でも綺麗な言葉がありますよね。『身を寄せればそれは盾となる。』

皆様、私達が何かいいことをしようとする時、全然前が見えない所にたって足を動かさなければならぬ時、その時、「先ず神様に委ねる」このような心が信仰の基本ではないかと思えます。

今日の福音は、特別に宣教師達に言われる話ではありません。彼らに限られた話ではないのです。信仰を持っている私達全ての人が、何かをする時に、不安に陥ってしまう状況にあっても、私達は「あなたを信じます。守って下さることを信じます。全てをあなたに委ねます。」という信仰が何よりも優先的であることを示している箇所だと思います。

さあ二番目、もし、あなたを受け入れなかったらその印として『足についた埃(ほこり)を払い落とさなさい。』とイエス様がおっしゃったのです。これは、その言葉通りにしなさいという意味ではありません。どんなにいいものを皆様が持っていて、その貴重な宝物を伝えようとしても、拒否する者は必ず現れることをあらかじめ教えた話です。

私は9ヶ月前に「一人が一人の宣教師になって一人の人に福音を述べ伝えましょう。」と話しました。それがなかなか出来なかった一番大きな理由は、その人をイエス様に会わせたい気持ちがなかったのではなくて、もし私が手を伸ばしたら、その人の反応がどうなるか気になって、それが心配だったのでしょう。そう思いますよ。それとも関心さえなかったのですか。(笑)

特に日本の文化の特性。迷惑をかけない社会が望ましい社会と言われる文化の中では、いいことでも手を伸ばすのが難しく、いいことも紹介するのに気をつかう文化です。しかし、文化を超えるのが信仰です。そしてこれは、命令です。果たさなければならない使命です。「皆様、その恐れを捨ててください。」というイエス様のメッセージではないかと思えます。

失敗することを考え、色々なことを考えたら何も出来ません。“あの人に私が悪く思われる可能性があるのを覚悟して伝える”のが述べ伝えるであることを今日の福音として考えましょう。

皆様にお願ひした結果として、今新しく勉強に入った人は、自分の足を運んで教会を訪れた二人しかいません。ということは、皆様の手によって教会に来た人は一人もいないことです。私としては空しいです。私の口が空しくなります。祭壇で御聖体をいただきながら願ったそういう望みが本当に空しく感じられます。

皆様未来の教会は、何よりも皆様の責任です。先祖の世話をする必要もないし、今、教会に若者達がないから教会がこれからどうなるかと心配をする必要もありません。今、信仰を持っている皆様が、自信感を持って使命感を感じながら述べ伝えなかったら、未来も過去もなくなります。100パーセント私達のせいです。

もう一回皆様にお願ひします。「先ず神様に委ねましょう。」委ねることはその人、その相手のために祈ることです。祈りながらその人が何の反応を見せても「私はすべきことはする！」という心で述べ伝えましょう。先ず家庭から信仰化させましょう。主人、妻、子供、兄弟その家族のために祈って下さい。

皆様にこの素晴らしい実りを体験していただきたいのです。どのくらい心が豊かになって幸せになるかを何故恐れるのでしょうか。私、司祭としては本当に心が痛いのです。

今日の福音を通してもう一回強調させていただきます。皆様の一言によって救われる靈魂が出来るかも知れません。それは皆様が今まで犯した罪、その罪がどんなに多くても、一人の靈魂を救うことが出来れば全部赦されます。これはイエス様の約束です。そういう意味で、私達が、自発的に主導権を持って進もうとするその努力が必要ではないかと私は思います。「お願ひします。」皆様、頭だけでもうなずいて下さい。(笑い)「お願ひ致します。」「はい！」

さあ、最後に明日は秋分の日ですね。墓参りと、亡くなった人の靈魂のために捧げるミサと、人間的な表現ですが、どちらが効果があると思いますか。

これは2000年間、教会の中で固く信じてきた信心です。イエス様の死と共に捧げるミサ、イエス様が私達のために死んでくださったそういう瞬間、意向を持って捧げる祈り、それが一番豊かな結果を出していると言います。

実際、私が日本に来て感じたことは、お盆になると教会に来る人の人数が減ります。先祖のためにお盆なので本当に集まるのか、疑いが起きるほどに、集まって殆どの方が遊びに出掛けます。もちろん家族の和睦のために、交わりのために必要です。しかし、その家族が、私達が今まで生きることが出来たのは、亡くなった親父、母、先祖があるからこそと、一緒にその人達をもっと思い出し分かち合いながら過ごせば、そして先祖の心を量りながら、その靈魂のために祈る雰囲気が出来れば、それが最高のお盆ではないでしょうか。

もしお盆の日、色々な親戚、兄弟のことで信仰的に違いがあって、別の式に与らなければならない

場合、毎日の平日のミサがあります。前の日にでもミサの意向として出していただきたいのです。今日も、私はもどかしい心で、皆様がミサの意向を亡くなった両親のために出す人がいなかったので私の方から声をかけたわけです。(亡くなっている両親の名前を一人一人紙に書いて祭壇に出して下さい。一緒に祈りますと司祭が導入しました。)

皆様今年はこのようにしましたが、来年からは亡くなったかたのために、その靈魂のために、私達の祈りが必要であることを意識しましょう。そしてお盆とか春分の日、秋分の日とか先祖のことを思い出さなければならない日に、亡くなった命日とかに、霊名と名前を書いてミサ意向として出しましょう。司祭の口から出されるその名前によって、祈りが深められることを信じましょう。

ありがとうございました。